

令和6年度 北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会 議事録

日 時 令和6年12月10日（火） 10:00～11:40

場 所 小樽市役所第2委員会室

出席者 （委員）

（会長）小樽商科大学 玉井教授、（副会長）小樽商工会議所 上参郷副会頭、北海道中央バス(株) 遠藤所長、（社福）小樽市社会福祉協議会 小山常務理事、（一社）北海道中小企業家同友会しりべし・小樽支部 近藤共育・求人委員長、小樽市病院局小樽市立病院 有村院長、（一社）小樽観光協会 徳満専務理事、（社福）赤井川村社会福祉協議会 上埜事務局長、公募委員 金澤委員、（一社）積丹町観光協会 山田事務局長代理、余市町文化財関係施設管理運営委員会 酒井委員長、古平町地域おこし協力隊 森隊員

（欠席）（一社）小樽市医師会 大本副会長、（一社）余市医師会 林理事、新おたる農業協同組合 森代表理事組合長

（各町村）

積丹町 平畠企画課長、古平町 人見企画課長、仁木町 奈良企画課長、余市町 金田主幹、（欠席）赤井川村 秋元総務課長

（小樽市）

柄澤総合政策部長、品川企画政策室長、赤井主幹、秋山主査、山本主事

【開会】

（司会）

本日はご多用のところお集まりいただきましてありがとうございます。私は事務局を担当しております小樽市総合政策部企画政策室長の品川でございます。どうぞ宜しくお願いいたします。それでは、ただいまから、令和6年度北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会を開催いたします。このたび、懇談会委員として新たに15名の方々を委嘱させていただきました。任期は、令和6年12月1日から2年間となっておりますのでよろしくお願いいたします。

【委員紹介・事務局紹介】

－司会より紹介（資料1）－

【設置要綱の説明】

－事務局より資料2により説明－

【会長・副会長の選任】

－委員からの意見がなく、事務局案に決定－

【会長・副会長挨拶】

(会長)

小樽商科大学の玉井と申します。共生ビジョンの策定ということで、私もまだまだ若輩者でございますけれども大学の立場として貢献できればなと思いますので、よろしくお願いいたします。

(副会長)

副会長ということで仰せ付けられました、商工会議所の上参郷でございます。まずは会長を補佐して、この会議が有意義になるよう努めてさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

【議事】

(会長)

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。まず、事務局から、定住自立圏構想についての概要説明、北しりべし定住自立圏としての取組の経過や実績、第4次ビジョン策定に向けた状況など、資料により説明をしてもらいます。その後で、委員の皆様からは、第4次共生ビジョンの原案についての御質問や、または皆様がそれぞれ関わっている分野などに関して、御意見や情報提供などをいただければと思っております。それでは、次第にあります「5」の議事、「(1) 定住自立圏共生ビジョンについて」の「①北しりべし定住自立圏について」「②主な取組と第4次ビジョンの策定について」事務局から資料の説明をお願いします。

(1) 定住自立圏共生ビジョンについて

① 北しりべし定住自立圏について

－事務局より資料3により説明－

② 主な取組と第4次ビジョンの策定について

－事務局より資料4により説明－

－事務局より資料5、6により説明－

－司会より補足－

仁木インターチェンジが令和6年度開通という記載がありましたけれども、現時点で開通日は明らかになってはおりませんが、令和6年度中に開通する予定と聞いておりますので、開通日見えてきましたら文言のほうを調整したいと思います。

【意見交換】

(会長)

ありがとうございました。定住自立圏構想の趣旨や北しりべし定住自立圏としての、この5年間の取組内容、圏域の現況について、そして第4次ビジョンの原案について説明いただきました。このあと、委員の皆様からは第4次共生ビジョン策定に向けての御意見等をいただきたいと思います。ありがとうございます、まず、これまでの事務局の説明について、何か御質問はありませんか。

(委員)

私の分野といたしましては移住のほうになるのですが、その視点で資料6のほう読ませていただいたところなのですけれども、その15ページの下のところに圏域における情報共有・情報提供の充実というのがございまして、これを見ますと圏域内の各市町村が持つ行政情報を共有して、積極的に提供する仕組みを作るということで、これまでの取組が広報誌やパンフレットという言わばアナログのコンテンツだと思うのですが、私といたしましては、デジタルプラットフォームという仕組みを構築していくことで、具体的には地域ポータルサイトの運営ですとか、移住者向けの空き家情報の提供だとか、各種支援制度をそこで搭載していくことによってより効果的な運用ができるのではないかと考えておりましたが、そういうデジタルプラットフォームの活用については御議論はされたんでしょうか。

(会長)

今のご意見について説明をお願いいたします。

(事務局)

圏域における情報共有の部分ですけれども、今ビジョンのほうに掲載させていただいているのが、委員がおっしゃったとおり広報誌などのパンフレット類を配置しているという形での部分であり、実際移住に関しても、そういった形で圏域内での連携というものが図られていないというところございまして、各自治体ごとに移住施策をデジタル的と言いますか、ホームページ等に載せた形での移住施策というのはやっているのですけれども、圏域全体としての移住の窓口というようなプラットフォームの形ではまだ進めることができていないというところが現状でございます。

(委員)

それをちょっとでもいいから目標に掲げたりとかそういう方向性は検討されたんでしょうか。

(事務局)

正直今回そこまでの検討はさせていただいていないというのが現状でございますので、その部分については、まだ視点として議論されていない部分でございますので、ビジョンに掲載することができるかどうか検討させていただきたいと思います。

(委員)

はい、ありがとうございました。

(会長)

御意見ありがとうございました。他にございませんでしょうか。委員どうぞ。

(委員)

資料3の1ページに特別交付税が中心市に8,500万円国から来ているのですが、そのお金はどこに充てているんでしょうか。近隣市町村で言えば1,800万円なんでしょうけど。

(事務局)

特別交付税ということで、どの事業に充てているかは決算上は見えてこないところでございます。あくまでも、資料6の45ページ以降に掲載しております事業がありますが、これら事業を国のほうに報告しております、これらの事業が小樽市ですと8,500万円以上、各町村で1,800万円以上あれば、その分特別交付税として入ってくる形となっております、今のところ各市町村、小樽市含めて、8,500万円、1,800万円以上の事業費の事業を進めさせていただいております、交付税として満額支給されているような状況となっております。

(委員)

わかりました。もう1つよろしいでしょうか。資料6の27、28ページになりますが、半分仕方ないかなと思いつつ、お話するのですけれども、協定書の中身なり課題の中で取り上げていることと実際やろうと思っていることの具体性が乏しいかなと思っていて、結局情報発信とかが多くなってしまっていて、私のイメージだと広域観光は小樽を拠点に北しりべしのまちを巡って、小樽に戻ってくるみたいなことが将来描こうとしているところでございまして、情報発信や連携に行きがちなのですけれども、27ページの上に記載してあるとおり観光商品や観光ルートの開発に取り組むところの具体的なところを下の欄やタイトルに載せて、もう少し取り組むんだというところを見せたほうがよろしいのではないかと思いますし、受け入れ態勢としてなんでも情報発信とかではなくて、具体的に北しりべしの魅力を発信できるような商品づくりみたいなのところに取り組むことをおのずと情報発信していけば、お客さんが来てくれる流れに繋がってくるのではないかと思います。

(事務局)

たしかに27ページの内容をこの5年間重点取組事項にしていますが、新型コロナウイルスを理由にするわけではないのですけれども、なかなか進めることができなかったということでございまして、委員おっしゃっていたように具体的に進めていかなければいけないという部分ですので、クルーズ船の部分も書いてありますけれども、あくまでそのクルーズ船のお客さんをどう北しりべしに行っていくかというようなところというのは具体的なプランなどを提案していった上でオプションツアーに組み込んでいただくとか具体的なものがないとなかなか来ていただけないというところがあると思いますので、タイトルなど事業内容についてはもう少し踏み込んだという形での部分を検討させていただきたいと思います。

(委員)

わかりました。私ばかりで申し訳ないですがもう1つ、この増加率の率の決め方っていうのはどういった方法でやっているのでしょうか。

(事務局)

増加率は、第3次ビジョンの増加率というものを踏襲しております。機械的なのですが、先程の資料5を見ていただき、例えば3ページの広域観光のところで申し上げますと、観光入込客数ということで、左側に第3次ビジョンの平成30年の現状値を載せておりますが、この数字で申し上げますと11,364.5、そして目標値が13,000.0とありまして、第4次ビジョンについては現状値が11,082.3、それに対して目標値が12,700.0となっておりますが、第3次ビジョンの増加率を第4次ビジョンの現状値に掛けたものが第4次ビジョンの目標値となっており、第3次ビジョンの現状値から見た目標値への増加率を使用している形になっております。

(委員)

そもそも第3次ビジョンの増加率はどこからきたのですか。

(事務局)

この増加率の考え方までは調べてはおりません。

(会長)

その他ございませんか。

(副会長)

資料6の25・26ページなのですが、目標値というのは農産物、水産物の額や量、製品の出荷額ということなのですが、まず農業の人が減る中でこの目標をどう維持していくのかということなんでしょうけど、それがこの中の具体的な事業の中にどう反映されているのかがいまいち見えないということと、26ページの若者の雇用支援というところで圏域内の就職の割合が増えるということになっているのですが、今までも具体的な事業でセミナーとかやっているのですが、それがどう具体的に増えて、たった2パーセントかもしれないけど、どういうふうにもこの数字が増えていくのかなというのがわからないなと思ひまして、以前は子供が1,000人くらいとかもったいたんでしょうけど、5年後は今の出生率からいったらものすごい人数が減ると思うのですが、その割合でいったらそんな達成できるのかなというのはありますけど、どうなのでしょう。

(事務局)

まず農水産物の部分については、動きとしては、ご指摘のとおりなかなか具体的なところは見えてないというところはあるのですが、1つは25ページの5番目の地域ブランドの販路拡大という形で海外に向けた販路拡大、展示会への参加に対する補助ということで、補助という形ですが、後押しをするというような形で販路拡大という事業をやっているところを聞いているところがございますけれども、それ以上に何か突っ込んで生産者の方を増やすなどそういったことまではなかなか今はできていないということが実情であるという認識をしているところであります。26ページの若者の支援ですが、たしかにこれから先、

お子さんが減っていく中、労働力の取り合いという形になっていく中で地元で暮らして引き続き働いていただく人を増やすということはなかなか厳しいというところは認識しているところではございますが、その中で高校生の圏域内就職割合が増加という形にさせていただいているので、実際パーセントといたしましてはなかなか厳しく、現状維持ということも考えたのですけれども、実際、第3次ビジョンのときの現状値に関しては先程の資料5の2ページ目になりますが、平成30年度では42.9パーセントという現状値で目標値を45パーセントに増やすという目標でしたけれども、実際には38パーセント、1度令和3年度に43パーセントと上がったことがございますが、それ以外は30パーセント台ということでなかなか厳しいというところがございますけれども、令和5年度で38パーセントという現状値がございまして、その時点で令和3年度のビジョンでは42.9パーセントの現状値に対して38パーセントと下がった状態を現状値として捉えてございますので、その下がった現状値であれば引き続き希望ではあるのですけれども増加ということで設定させていただいているのですけれども、なかなか現状として厳しいとは思いますので目標値としては現状維持とかですね、その部分もう一度検討させていただきたいと思えます。

(委員)

ただ、率なので、数を増やそうというわけではないですし、地元で働きたい人は多いと思えます。お金の条件を見ると札幌にかなわないというのはあるのですけれども、みんな札幌に行きたいと思っているわけではなくて、地元で働きたい人も多いと実感しているのですから数を増やそうというわけではないので、この1、2パーセントの増加であれば頑張るんだという意味合いで僕は悪くないとは思えます。

(副会長)

ただ、増加するんだったら、具体的な事業が何も赤字が入ってないので、つまり何も変わらずやるってことになってしまうので、取組としてどうなのかと思ってしまうので、割合を増やそうと頑張るんであったら赤字が増えないと変ではないのかなと思いました。

(事務局)

今やっている事業として資料6の49ページの事業になりますけれども、若者就職マッチング支援事業が小樽市でやっているという形になっているのですけれども、パーセントでいくとそんなに上がっていないのかなと思えますけれども、こういった事業についてですね、今までの事業でいいのかというところの検討ということをする必要があるというふうには考えているところではございます。今までの5年間を考えて、新たな事業として追加を何かできるかどうか、ビジョンに掲載できるような事業があるかどうかということを担当課とも相談させていただきたいと思えます。

(会長)

時間が1時間経ちましたので、まだ質問のある方もいるかと思いますが、ここから意見交換のほうに入りまして、その中で質問がありましたら、また質問していただくようお願いしたいと思います。それでは、意見交換に入りたいと思いますが、事務局からは、第4次共生ビジ

ョンの原案づくりに生かしたいということです、委員の皆様からは、それぞれの御活躍の分野などに関連して、御意見や情報提供等をいただければと思います。申し訳ありませんが、時間の都合もありますので、2～3分程度でお願いいたします。まず0副会長のほうからよろしくお願いいたします。

(副会長)

質問したばかりでありませんが、非常に資料がものすごい量でなかなか全部は読み切れていないところですが、自分の分野のところを見てもですね、なかなか現状的には大変な部分も多いなと思いますが、先程も言ったとおり目標値が上がるんだったら、何か一生懸命やらなければいけないでしょうし、それは大前提ではないかなと思いますし、現状維持すら難しいこの時代というかこの地域の難しさがあると思うので、その辺についてやはり、ただ数字を変えているだけかなって、一生懸命資料作っていただいて申し訳ないですが、なんとなくそういう数字だけが動いているような感じが見えてしまうところが感じたところであります。

(会長)

ありがとうございます。それでは次の委員お願いいたします。

(委員)

医療のほうで問題なのはネットワーク、情報共有のところなのですね。今問題になっているのは、市立病院がやっているID-Linkが思っているより普及していないことが1つと、もう1つ介護を巻き込んだネットワークが問題になっていて、小樽ワンチームというネットワークがあるのですが、それが廃れてきていて、そこをどうするかというところが問題になっていて、できればこういった話し合いの中で、例えば函館とか名寄は市町村をあげて医療のネットワーク化を進めていて、救急医療にも必要だし、患者の転出入の運用にもすごく使われていますが、小樽はその辺が全然進んでいないので、是非とも医療側からしますとネットワークの強化という部分为目标にお力添えいただければと思います。

(会長)

ありがとうございました。それでは次の委員お願いできますか。

(委員)

福祉のほうからということで、ちょっと個人的な意見も述べさせていただきたいのですが、まず福祉のほうから言えば、赤井川村の住民さんというのはほとんど小樽の病院に通っているのですが、これは医療の問題というよりは足の問題になってしまって、どうやって小樽の病院まで通うかということが問題で、どうしても赤井川村の診療所にはMRIもCTもないので、検査とかできないので、結局全部小樽や余市の病院に行かなきゃならないということで、結局住民の皆さんは足の問題になってしまうかなと思われます。私個人といたしましては、30年くらい赤井川村に住んでいて、去年の秋に小樽に引っ越して来たのですが、それで小樽に住んでみて、なかなか小樽の情報というのが、取り入れられない、どこに美味しいお店があるとか、どこにどんな仕事があるとか、なかなかそういうのが個人的に取り入れられないので、結局インスタグラム見て、こんな美味しいお店があるんだとかみたいな感じでしか情報が入っ

てこないというか、以前私はコロナ前にもこの委員に入っていたのですが、その頃はインバウンドに向けた発信というのをされていて、コロナになって結局インバウンドなくなって、私的にはやっぱりこの北後志とか小樽の中でもっと交流とか小樽の人が余市、仁木のワインツーリズムに行くとか、そういうことをやっているのかなという、自分たちの地域を自分たちがどれだけ知っているのかなというところで、やっぱり観光客というのは、小樽いいって言うのですけれども、結局一生に1,2回しか来ないけど、近くの人たちはもっと飲食店使ったりとかできると思うので、もっと内部の情報を自分たちで持っていないと発信もできないし、自分たちも行っていないこの町村のこれがいいとか、小樽のこれがいいとか、そういう情報の共有をできたらいかなというところ、この会議では思っていました。

(会長)

貴重なご意見ありがとうございます。それでは次の委員お願いいたします。

(委員)

中央バスという立場ですので公共交通の現状について簡潔に述べたいと思います。まずは皆様日頃から当社事業に対しまして、ご協力ご支援ありがとうございます。報道等でもここ最近非常に出ておりますが、バス事業には大きく2つの課題がありまして、先程の資料にもありましたが、少子高齢化や人口減少に伴いまして、そもそもの利用者が減少しているということで、北後志地区大半の路線が赤字で補助をいただいで運営しているという状況でございます。こうした収支の問題もありますけれども、もう一方は乗務員不足ということで、先程資料6のほうでもありましたが、このたび12月に運賃改定を行いまして、処遇改善を行っていくと報道等でも出ておりますが、ただ一方で大型二種免許を所持しているのは日本全国ほぼ50代以上という状況があるということです。また、若年層の運転離れということも課題としてありますので、処遇改善や企業努力だけではなかなか解消に至らないということが現実としてあるかと思えますので、乗務員不足による減便等の流れというのはなかなか止まらないであろうということが当社や日本全国の公共交通の課題としてあるかと思えますので、ご理解いただければと思います。また一方で北後志地区、小樽始め観光資源が豊富ですし、最近コロナが明けてインバウンドも増えてきておりますので、観光面での当社の投資というのを見極めながら行っていきたいと思えますので、大型二種免許持っているドライバーが経営資源となっておりますので、そこを選別してどう投資していくかということが一民間会社の事業の課題としてありますので、皆様にもご協力いただきながら、そして行政とも連携しながら取り組んでいきたいと思っております。

(会長)

ありがとうございます。それでは次の委員お願いいたします。

(委員)

若者がいなくて、年配の方がとても多いということは、年配の方たちがもっと活躍できる場があったらいいのではないかなと思います。定年されても全然今の方たちは若々しくてパワフルな方が昔と違って多いと思うので、雇用条件もいろいろあると思うのですが、年

年齢の幅を広げてもらったら、定年された後とかももっと活躍できる場所がたくさんあるんじゃないかなというのがありますし、あと若者世代に対しては学校で職場体験に力を入れているところの就職率はとてもいいと聞くので、たくさん企業があつて、職場体験することによって、こんな仕事があつたんだとか今まで全く知らなかった職業を体験して興味を持って就職したという方もたくさんいると思うので、どんどんそういう企業と学校がたくさん連携取れたらいいのではないかなというのがありますし、あと仕事柄観光地で観光の方と絡むことが多く、割合でいうと海外の方が多いのですが、海外の方の話を聞くとやっぱり小樽は魅力的で小樽ブランドは小樽市民の方たちが思っている以上にすごい強みだなと思うのですよね。ただ、仕事でニセコに行ったことがあつて、ニセコって結局ぱっと見活性化されているようでも、地元の人たちが全然潤ってなく、海外の人たちが土地を買い占めて、ホテルを建てたり、道のないまっさらなところに土地を買って別荘を建ててるのですが、道まで作ってしまったり、川があつて橋がなかったら、橋まで作ってしまうらしいのですが、なんでニセコがそうってしまったかと地元の方たちの話を聞くと、たまたま裕福な方が1泊何十万円のホテルを建てたところそれが当たって、それがきっかけでどんどん増えていったらしいのですが、小樽にもたくさんホテルはあるのですが、1泊何十万円もするホテルはないので、そうすると富裕層の人たちはどんなにブランドがあつても金額が低いものには価値を持たないらしいので、小樽もそういう富裕層向けの施設があつたら違ってくるのかなと思いました。あとはクルーズ船が人気なのは観光の方たちからはよく聞きますので、北後志管内をルートとして観光する場所があるというのはすごい強みだなと思いました。

(会長)

ありがとうございました。それでは次の委員お願いいたします。

(委員)

はい、福祉の分野では成年後見センターと消費者センターが書かれているのですが、これについてはこれからも充実を継続させていかなければならないので、この記載自体はこのままでいいと思いますが、ちょっと分野は違いますが地域公共交通のところなのですけども、今まで新幹線が通った後の代替交通とかそういったことはビジョンには記載していないのですが、開通時期とかいろいろ問題があるんでしょうけど、そろそろ新幹線の代替交通について議論も進んできていると思うので、今回この11年までのものに載せるかは別にしてその辺の議論や検討は必要なのかなと思います。もう1点、クルーズ船の話なのですが、私、今年日本丸のクルーズに乗ってみまして、すごい感じたのは、船の中で実際に現地の人に来てPRするというののもすごい情報として乗っている者に重要だなと思っておりまして、船社さんとか観光業者がパッケージを作つてオプショナルツアーを作るのもいいのですけれど、それ以上に実際の乗客がどこにお金を使おうかといった際に、現地の方が具体的なPRをされるのが非常にいいなと思いましたので、この辺は1つ考えてみてもいいのではないかと思います。

(会長)

ありがとうございます。それでは次の委員お願いいたします。

(委員)

中小企業家同友会ということで、雇用についてなのですが、実際これは人口減少しているの
でどうにもならないし、食い止めるのは難しいのですけれども、先程金澤委員がおっしゃって
いたところのキャリア教育というところで、そういったところをやっていかなければいけない
ということもありまして、またこれは産業振興のほうでセンチュリープラザオタルというこ
ろにも入っておりまして、この間、京都とか福井、前回は物づくりの会ということもありまし
て燕三条のほうまで見てきましたが、やはり地域の企業が地域と一体となるための仕組みづく
りですとか学校に対しての呼びかけというところが進んでいるなと思います。それは小樽市も
やっていきたいなというところで考えていますし、小樽市としてかなり多くの取組をされてい
る中で皆さんに周知されていない部分もあるなと思っております。これも一応企業の集まりで
すので、この部分もいくらか共有されているのですけれど、もっと共有していったほうがいい
ですし、また社内でも各社さんで共有してほしいところはもっと徹底していった欲しいなとは
思っています。あとは、一番簡単な方法では紙媒体だとかネット媒体などという話もあります
けど、やはり駅前とか目につくところや、昔あったデジタルの広告、今となってはローテクか
もしれませんが、意外とそういったことも有効なのかなと思います。なので、周知する取組
はしっかりされているので、もっと周知していくということはすごく大切だと思いますし、ま
た学校と企業の結び付きというのもしっかりやっていき、学校内や企業内での周知、また企業
にとって、それは意外と社員の教育にもなっていったりする部分にもつながっていくので、多
くの企業がそういうふうなものを取り組んでいけるように中小企業同友会のほうもしっかり
考えていきたいなと思います。

(会長)

ありがとうございました。それでは次の委員お願いいたします。

(委員)

私は教育部門ということで、まず教育部門のほうからと、あと文化財のほうからで、どうい
う視点で見ればいいのか私も見当つきませんが、赤井川村にしても積丹にしても古平にしても
結局高等学校がないのですよね。ですから中学校を卒業すると小樽、余市の世話になるか、そ
の辺の視点がまったくここにはないので、それに伴って通学するというふうになるとバス輸送や
電車との関係があるからその辺の視点では欠落しているのか、私が見落としているのかわかり
ませんが、その辺どういう視点で立てたらいいか見当つきませんが、その辺の視点を少し
考えたらいいのかなと思いました。それともう1点は文化財のほうなのですけれども、赤井川
村、古平、積丹、余市は先史時代の文化財を持っているが、その先史時代には行政区分がない
わけですよね。ですから1つの地域性として石狩湾なり積丹半島という形で、学芸員さんを置
いているところは小樽と余市くらいしかないかなと思いますから、その辺共通して展示の仕方
にしても赤井川村の黒曜石を持ってきたとか交友関係が結構あったと思うので地域性として、
その辺の視点を少し考えること、例えば小樽と余市あたりだとストーンサークルが忍路、余市

にあるし、それから手宮の遺跡と余市のフゴッペの遺跡が共通性もあるというような形で学芸員が共通してイベントを組むとかそういう形の視点があるのではないかと思いますし、各町村で国指定の有形、無形の文化財があると思うのですけれども、小樽も大変だと思いますが、施設の文化財見たら劣化してすごいですので、それを文化庁に要求したときにやはり地域として要求したのと小さい町村が要求したのではかなり違うと思うのですよね。ですから文化財のそういう形も共通して修理するとか視点を立てていくといいのかなと思います。

(会長)

ありがとうございました。それでは次の委員お願いいたします。

(委員)

ありがたいことに観光のネタが何から何まで出まして、お答えしたいこともあるのですが、時間もありますので、そこは置いといて、小樽観光協会としては、交流人口の拡大が定住移住に繋がるとあって、多少背伸びしながら事業を進めております。クルーズ、海外、国内問わずこれからの観光というのは滞在型観光商品の示し方で滞在時間の延長が図られるところであると思って取り組んでおりますけれども、小樽のみならず後志の商品も増やしていくことがとても大事だと思っていますので、ここに記載があろうがなかろうが我々はそういう視点で各町村さんと連携しながら、お客さんに示していけるような構想を描きながら1歩ずつ進んでいきたいと思っています。

(会長)

ありがとうございました。それではオンライン参加の委員お願いいたします。

(委員)

先程、デジタルプラットフォームの活用が有効じゃないかという話をさせていただいたのは、個々の自治体で具体的に取り組むことと北しりべし定住自立圏共生ビジョンにおいて広域で取り組むことの役割分担が必要だと思っていて、広域で取り組むときには情報ということが肝になってくるんだろうなという話をしたつもりだったのですけれども、その中でできればポータルサイトのなんかを構築していきながら移住定住者の増加に寄与できるような施策が必要なのではないかと思いますし、その上で個々の自治体のおためし移住体験や農業体験あるいは支援制度、空き家バンクとかそういった情報を搭載していくようなサイトがあるといいなという意味で発言させていただいたのですが、そういったプラットフォーム作りというのが必要なんだろうなというふうに思いました。なかなかそういう情報が個々に取りに行かないとわからないということだったので、私も移住者の1人として情報が足りないなというように強く感じるものですからそういう発言させてもらいました。そして、分野が違って大変恐縮なのですが、蘭越町について、北後志ではないのですが、先程新幹線が通った後の代替交通手段の話も触れたほうがいいのかということで、蘭越町の場合、地域公共交通計画というのが今進んでおりまして、その際に基本的には地域住民の足を確保するというのを念頭に置きつつデマンド交通や定期便とのハイブリッドタイプの公共交通計画というのが進んでいるのですが、その場合やはり先程も話が出ていたのですけれども、デマンド交通の事業者ですが、これまでの

事業者だとかなり負担が大きくなってくるので、その事業者の確保をどうするのかという課題と、デマンドですからオペレーターをどうするか、とても事業者ではやりきれないよという話になってきて、その役場の職員がやるとか、あるいは新たに3人くらい人を雇ったりするそういった施策があったと聞いておりますけど、その具体的なところで結構大変なのですよ。それが地域公共交通の1つの課題だと思っているのですが、さらには地域の方々は広域的に移動するので、その時にやはり自治体の枠の中だけの計画では足りなくてですね、あの広域的な連携っていうのが、地域公共交通で求められているという状況なので、共同運行とかその辺のところはこの北しりべし共生ビジョンで考えていかなければいけないことなのではないかと感じております。なぜこのようなことを言うかと言うと、私は蘭越町の地域公共交通計画の委員なので、余計なことまで情報提供させていただきました。

(会長)

ありがとうございました。それでは最後になりますが次の委員お願いいたします。

(委員)

積丹で今問題と考えているのが、夏のお盆以降の集客が減っているような状況で、あのインバウンドの方々がたくさん来られているのですけれど、ちょっと危険が及んでいるところですね、インバウンドの方々はレンタカーで結構来られているのですけれども、そのインバウンドで来られている方々の運転マナーが悪くて、地元住民の方とトラブルがあったり、接触事故があったりと危険が及んでおります。インバウンドを呼び込むということはとてもいいことですし、地域経済にも寄与される場所なのですけれども、インバウンドの方々の交通マナーに対しては、日本の交通事情に則った交通マナーというものを発信していける場所があればいいのかなと感じたというところが1点と、コロナ禍になって、観光客についていろいろ変わってきていると感じている部分が多くてですね、やはり冬場の積丹半島、小樽市も含めて、積丹までの集客というのがだいぶ少なくなっているのが現況だと思っています。そういった中でですね、アメリカから神威岬まで生活交通バスが運行しているのですけど、生活交通バスがですね、おかげ様で結構運送実績はあるのですけど、予約の方法だったりとかでもう少しQRコードから予約できるようにしてほしいとか小樽からアメリカまでどう行ったらいいのかということも含めて情報発信が足りなかった部分もあるのかなと思いますし、小樽駅内の観光案内所等で発信してくれたりとかしていただいている部分がありますので、そこはすごく連携していけてありがたいと思いますので、いい形で発信できたらなと思っていたところでございます。

(会長)

ありがとうございます。これで皆様からいろいろと良い意見をいただきました。ありがとうございます。最後に私のほうからですけれども、大学の立場から申し上げますと、学生を持っておりますが、なかなか小樽市民ではない学生も多いが、北海道の人材はかなりおります。最近では女性の活躍と申しますか、女性のほうが多くなるような状況にもなっております。その中で情報提供というところで、まず1つはこれは北海道の体質なのですから、大学に通えない地域の方がいるので、そういうところにサテライトオフィスを置いて、そこで教育をして単

位を取得することができるのか、そういうものを行っていることと、もう1つはリカレント教育もやっておりますので、ビジネススクールというものを札幌でやっているのですが、リカレントとして学び直しの機会を作っていこうということで、社会人の人に対していろいろと講義を提供するようなことも来年からスタートするような予定もございますので、ぜひこういうところもご利用いただけたらと思っております。それと今日のお話をいろいろと聞きながら、やはりコミュニティ作りというのは1つのビジョンが必要かなと思います。どういうふうなコミュニティにしたいのかという部分を明確にしていけば、それによって対応策とかそういうものを考えていかなければいけないと思いますので、そういったことも今後考えていけたらなと思います。粗末でございますが、以上でございます。

それでは、ただ今、それぞれの委員の皆様から頂いた意見等につきましては、事務局で改めて整理していただき、第4次共生ビジョンの原案づくりの参考としていただきたいと思います。事務局から何かありますか。

(事務局)

今、皆様からいろいろなご意見いただきまして、雇用について新たな事業ということが目標達成に向けて必要ではないかというお話ですとか、病院の介護含めたネットワーク強化の問題、そして地域のことをどれだけ情報共有できるかというお話やバス事業者の問題とか若者の運転離れということも問題の1つであるというお話がございました。またインバウンドの関係、ニセコの潤いに対して、小樽でも小樽の地元の人が潤うようなそういったことも考え方として必要ではないかというお話や新幹線の代替交通について、まだこのビジョンには載せておりませんが、この先考えていく必要があるのではという部分でのお話ですとか、インターンによる学校への呼びかけの部分の必要性や文化財の部分で積丹半島というエリア全体で文化財の魅力があるというところでの展示の仕方というようなエリアでの接点というところの重要性というお話、そしてクルーズ船で消費を増やすという必要性のところのお話と移住に向けたデジタルプラットフォーム、いわゆる各市町村でやっているものだけでなく広域全体でのポータルサイト的なものといったところの必要性、インバウンド観光の部分での問題点として、交通マナーについてのお話、あと大学でのサテライトオフィスやリカレント教育などのお話や、コミュニティ作りについてはビジョンが必要ではないかというようなお話をいただいたところであります。これらのご意見を踏まえまして今後原案のほうについては再度調整をさせていただきたいというふうに思っております。そしてその後、先程説明もございましたけども、準備ができましたら、パブリックコメントのほうを行いまして、ビジョンについてはさらに小樽市、また圏域の皆様のご意見をいただく機会をいただきたいと思いますというふうに思っております。そしてそういったパブリックコメントを踏まえまして2月頃に第4次ビジョンについては完成をさせて、令和7年度からビジョンを動かしていきたいと思っております。完成したビジョンにつきましては、委員の皆様にもフィードバックさせていただきたいと思っております。またこの定住自立圏の取組はビジョンに掲載されていなくても、連携が望まれる事業などが出てくれば随時取組を進めていきたいというふうに考えておりますし、各市町村で無理することなく

意義のある連携の取組というものを増やしていければ、この定住自立圏という枠組みが活かされんと思っておりますので、引き続きご協力をお願いしたいと思っております。事務局からは以上です。

(会長)

ありがとうございます。ここまでで議題等は終了しましたが、全体として何か質問等ございませんでしょうか。

(事務局)

事務局から1点ご連絡させていただきます。本日、参加いただきました皆様への報酬のお支払いにつきましては、こちらは準備ができ次第、以前こちらにお知らせいただいた口座のほうに振り込ませていただきます。振り込みに際しては、通知等はお送りいたしませんので、通帳の記帳などをご確認いただければなと思います。また、ビジョンの謝礼について辞退されるという方については、辞退届を書いていただくことになりますので、会議終了後事務局までお声がけください。以上です。

(会長)

ありがとうございます。その他ございませんか。

以上をもちまして、ビジョン懇談会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。

以上